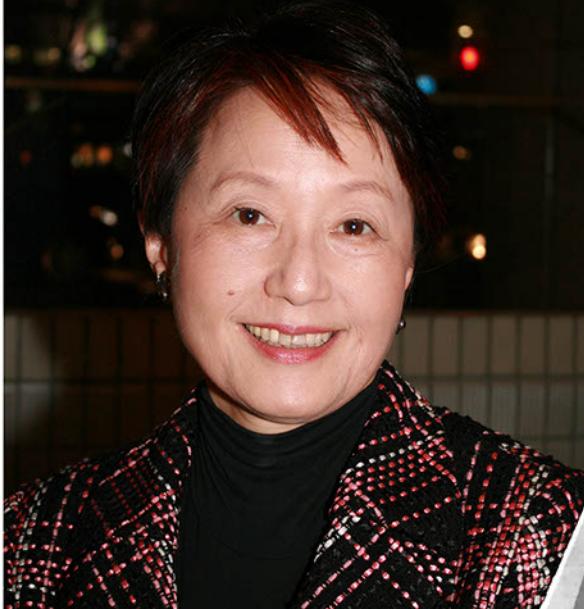


2011 5 あけぼの いのちをつなぐ—今とともに育つ「母」と「子」

特集 対談 一生をともに過ごす街ー「ある日突然」から「この街で」新井 満×トワ エ モワ
食べるが生きることの基本 斎藤由香
子育ては暖かい手に助けられながら 杉山晴美

連載 “ことばの杜”への小道 Part II / 人を育てる「赤ちゃん登校日」 お相手・高塚人志氏／山根基世
ミステリアスな日々／「わたしたちを誘惑におちいらせず……」木崎さと子
活憲とヒューマンライツ(人権)／北アフリカの騒乱の背景に米国の新自由主義があった伊藤千尋
光と風のおくりもの／夫婦喧嘩三浦暁子
キリストの足跡／キリストの中へ沈められる百瀬文晃





山根基世

やまね・もとよ

NHK退職後たちあげた、有限責任事業組合「ことばの社」代表。著書『ことばで「私」を育てる』『「ことば」ほどおいしいものはない』ほか。



高塚人志

たかつか・ひとし

鳥取大学医学部准教授。とっとりコミュニケーション研究会会長。著書に『赤ちゃんと力一人との関わりが人を育む』『いのち輝け子どもたち』ほか多数。

“ことばの社”への小道

Part II

第5回



人を育てる「赤ちゃん登校日」

高塚 先にお尋ねしますが、今はどんな活動をされているのですか？

山根 私と同じ時期に定年退職したアナウンサーが集まって、子どもの言葉を育てる活動をしようとL.L.P.（有限責任事業組合）「ことばの社」をたちあげ、一〇〇七年七月一日にスタートしました。三、四十年日本の話し言葉を担ってきた、N.H.K.八十五年の歴史の中で積み重ねてきたその話し言葉のノウハウを、子どもたちに伝えるといつっています。苦しんでいる子どもたちの状況を変えていく力になつていきたい、という思いで集まっています。

高塚 お仲間は何人ぐらいですか？

山根 アナウンサーが五人、全員で七人です。

高塚 活動内容としてはどういったことを？

山根 二つの柱がありまして、一つは音声言語の活動。読み聞かせ、朗読など、子どもの言葉を育てるなどを猛勉強中です。人間の子どもは他の動物と違つて、生まれた後に学習しなければ言葉を得できないので、言語形成期の間にきちんと日本語を聞かせておくことが非常に大事だと思います。日本語の中には美しい響き、リズム、声の温もりがありますが、幼い間に人間の声の温もり、日本語の美しさ、心地よさのようなものを植えつけておきたい。なので読み聞かせや朗読を大事にしています。もう一つは話し言葉のテキスト作りです。高塚先生がめざされていること

まず「役立ち感」を体験する

に近いと自負していますが、今学校の国語教育は読み書きが中心で、話し言葉としてはスピーチやディベートに重きが置かれていますよね。でも子どもたちに必要な切実な力は、隣の人と日々の暮らしの中でどう心を通わせるか、で、この力がなしがゆえに周囲の人といい人間関係を築くことができない。いい人間関係を築くことは、その子らしい納得できる人生を生きる上で最も必要な力だと思いますが、その力を養う場がない。だからそういう場をつくっていきたいと思っています。これまでには家族、地域社会の中、人間関係と共に自然に言葉がどう動くかを学んでいましたが、そういう場がなくなりました。ですから今は学校でやらざるをえないだろうと思います。そのためには、学校で、初心者の先生でも教えられるような話し言葉のテキストが必要だと思うのです。そのテキストづくりに東京学芸大学の先生たちと取り組んでいます。

高塚 隣の人と心を通わせる。まさにコミュニケーションですね。私は、コミュニケーションとは、お互いの考え方や気持ちを理解しあうことだと考えています。とりわけ、情報を伝達するだけでなく、お互いの感情を伝えあいわからあることもコミュニケーションの大切なポイントだと思ってます。若者たちの多くは情報伝達＝コミュニケーションというところをしています。他者に関心を向け、感情面に気を配ることはとても大切なことです。

山根 アナウンサー出身の私たちが社会貢献をしようとしているので、どうしても言葉にボイン

トを置くことになりますが、究極の目的は、子ども自身が自分で納得できる人生を切り開いていく人間力としての言葉の力をもつてほしいと思ってます。自分の目でものを見、自分の頭でものを見たときに「赤ちゃん登校日」の授業をお始めになつたきっかけは?

高塚 私は、二十八歳でB型肝炎を患い一度の入退院、休職もしました。医師からは不治の病だと言われましたが、生活の基本である食を正すことで今日までなんとかいのちをいただいています……。

山根 最初は「食」から入つていかれたのですね。

高塚 世の中がまだ食や環境などの視点に向いていない時代に食教育の道を他の教職員とつくりあげ実践し続けました。その後、夜間の定時制高校に赴任しました。教師としての生き方・あり方などいろいろ問い合わせられた六年間でもありました。

そして、平成八年の春、突然の転勤。その高校は全国でも例がない人間関係づくりについて学ぶ授業を教育課程に位置づけ実践するというものでした。授業がうまく転がらなくて悩んでいたとき思い出されたのが、夜間の定時制高校に勤務していたとき、午前中の時間をを利用して保育園やおじいちゃんおばあちゃんの施設に行つて、食といのちのメッセージを語っていたことです。

おじいちゃん、おばあちゃんから、「ありがとうございます! 先生から元気いただきました!」と言われる。園児たちから、「おっちゃん! また来てね!」と言われる。「そばにいる人から喜ばれる喜び」の体験を身をもつて知ったんです。俺みたいなおっちゃんでも、「そばにいる人から喜んでもらうこと」がこんなにうれしいことなんだ」と気づく。それを、授業の柱の一つとして高校生に体験させることになりました。大切にしたことは、パートナーと「対」で継続。人に責任をもつて向まうことの繰り返しです。相手と良い関係をつくるには、相手にあたたかい関心をよせ、相手に近づき、「よくみること・きくこと・伝えること」を自身の実体験から気づき学んでいきます。ちょっと心が揺れている子どもたちが、関わり体験のあとで「先生! ぼくみたいたのでも役に立つてあるんだよね!」と語りかけます。その言葉を何度も耳にしながら「役立ち感」という言葉を私は命名しました。

山根 先生のキーワードですね。役立ち感。確かに人を支えますよね。

高塚 「そばにいる人から喜ばれ、役に立つた

という「役立ち感」が自分という存在に自信を持たせる。自分を信じる子どもになつていく。自分が好きになつていく。父さん、母さんに愛され抱きしめてもらうのが一番なのですが、お父さん、お母さんのいらない子もたくさんいます。「おまえのことを気にかけてるよ」「大切に思つてゐるよ」ということが日々の生活の中で実感されなければ、大きな人生の後押しで、「もう一歩歩いてみよう!」となりますね。このことは、子どもたちだけでなく大人の私たちも同じですね。愛されている体験を教育の中で日々行っていく中で

高校生が日々輝きを取り戻していくんです。まさに、攻めの教育相談ですね。そのうちに、家庭科の先生が「先生、保育園に行つて、いい学びをし

たり、気づきをしているけれど、親がどんな思いで子育てしているかは、保育園の先生からじや、なかなか伝わらないですね」のアドバイスから、「赤ちゃんを育てているお父さん、お母さんに赤ちゃんを連れて学校に来てもらえばいい」となったのです。早速、管理職や関係者と話しあい「赤ちゃん登校日」の誕生です。

山根 赤ちゃんに子どもたちが触る、それを教育の素材にしていくのは、親と学校だけではなく、教育委員会やその他の公的機関の許可など大変な気がしますが、難しくなかつたのですか。

高塚 時代だと思います。今は体験やコミュニケーションという言葉が文科省の資料にもよく出てきますし、保育園の乳幼児やお年寄りに子どもたちが関わることも珍しくないです。私たちが授業実践を始めた十数年前では教育委員会には衝撃だったでしょうね。

山根 なにが決め手なのでしょうね。

高塚 保育現場の理解ですね。私たちが教育現場での高校生の様子を保育園に伝えたのです。そうすると、保育士さんたちが子どもたちの名簿を見て、この子は私たちの保育園を卒園した子じゃない?となつて、「私たちは子どもたちを保育園できちんと向きあって育ててきたつもりだけど、何が足りなかつたのだろうね」と。「一緒に勉強させてください! 学ばせてください!」と保育士さんたちがおつしやつて。

不思議な「赤ちゃん力」

山根 少しずつ様子が変わってきてはいたんでしようね。「赤ちゃん登校日」をもうけられるようになられたのは?

高塚 七年前、大学に勤めるようになって、私が地域貢献として何がやれるかを考え、赤ちゃんふれあうところからスタートしました。そのあと、学校現場の先生たちが日々感じていらっしゃる子どもたちの人間関係力や自尊感情の低さなどを解決する一つになれば、と試行錯誤の中で「赤ちゃん登校日」授業を作つてきました。

「赤ちゃん登校日」授業は、全四回の学習プログラムです。コミュニケーションの基礎を学ぶ「事前学習」と、三回にわたる赤ちゃん親子との「関わり体験」からなります。「事前学習」では、体験学習を通して、他者にあたたかい関心をもち、相手に近づいて「みること・きくこと・伝えること」の大切さを学びます。「関わり体験」は、児童・生徒と赤ちゃん親子が一対一でペアになり、

自分をオープンにしてお互いがつながる喜びをたくさん積み重ねる。あたたかい関心を他者に向ける。そして共感のコミュニケーションをするとの楽しさ、難しさを感じ取っていく。自己肯定に基づく人間観を育み、お互いがつながる喜びを共有しあう。そうなければ学校現場で安心してお互いが学びあつていくクラスを作つていけますね。

山根 クラス全体の雰囲気が変わりますね。「赤ちゃん登校日」ではクラスの仲間のいいところが一同に見れます。子どもたちのさまざま、見えなかつたところに気づかれますね。感じになりますか。

高塚 一番大きいことは相手に関心を向けて共

感のコミュニケーションができるようになること

です。親子関係の中で、子どもたちは自分の思い、喜怒哀楽の感情や知りえた喜び、発見したものを「お母さん、お母さん!」と言つて伝えますよね。「見て、見て!」と。最近の親子事情で気になることがあります。それは、「それがどうしたんだ?」「あとにして!」「それはおかしい、間違いだ!」というような向きあい方です。これでは子どもたちが、自分の思いを相手に伝えたり表現することがあるのです。それは、「それがどうしたんだ?」「あとにして!」「それはおかしい、間違いだ!」というような向きあい方です。これでは子どもたちが、自分の思いを相手に伝えたり表現することもあります。ところが、赤ちゃん親子とは、自ら構えることもなく、心開いて安心して向きあうことができます。なぜなら、赤ちゃんからは「否定や批判」の言葉は一切届けられることはありませんし、パパママも真剣に子どもたちに向きあつてくれます。まさに、赤ちゃんの力を借りて、人間関係、コミュニケーションについて学ぶことができるのです。

自分をオープンにしてお互いがつながる喜びをたくさん積み重ねる。あたたかい関心を他者に向ける。そして共感のコミュニケーションをするとの楽しさ、難しさを感じ取っていく。自己肯定に基づく人間観を育み、お互いがつながる喜びを共有しあう。そうすれば学校現場で安心してお互いが学びあつていくクラスを作つていけますね。この「赤ちゃん登校日」ではクラスの仲間のいいところが一同に見れます。子どもたちのさまざまな、見えなかつたところに気づかれますね。感じになりますか。

高塚 あのいじめっ子があんな笑顔で赤ちゃんを抱いている、とか。

高塚 その通りです。責任をもつて「ちいさな

いのち」に一生懸命向きあおうとしている姿ですね。一対一の逃げ場のない関係を作つてていきます

から。

山根 「赤ちゃん力」という言葉をおっしゃっていますよね。あれは確かな力ですね。

高塚 赤ちゃんは魔法の力をもつてているというところから「赤ちゃん力」としましたが、赤ちゃんに向かって、「そばにいる人の心をあたたかくしてくれる」「そばにいる人を元気にしてくれる」「親に感謝する」とに気づかせてくれる」「生きる」との大切さについて気づかせてくれるなど……。

山根 生後八か月の男の子に絵本の読み聞かせをしました。下に一本だけ歯が生えているのですが、谷川俊太郎作の『モコモコモコ』を読むと、モコッと言うと不思議な顔して、その後にニコッと一本ある歯を出して笑うのです。食べなくなるぐらいかわいい。(笑い)

高塚 自分の心の奥底にしまつてあるものをいっぱい引き出してくれる力もあります。とりわけ、自分のやさしさに気づかせてくれたりしますね。

山根 しかし不思議ですよね、「赤ちゃん力」ってなんなんでしょうね。

高塚 赤ちゃんの全身からのプラスのストロー^(飛り) やたくさんの愛情、いろんなものに、子どもから大人までみんなが気づいたり学ぶために何もできない未熟なままで生まれてくる。だからのお世話にならないと自らのいのちをふくらますことのできない赤ちゃんを神様がおつくりになつたので

でしょうね。

山根 今の子どもたちが言葉を育てられないのは家庭も地域社会も異年齢が集まらない。同じ世代で、家庭の中では母と子だけ。高度成長期は日本で、経済最優先で、工場ができ、空き地が多くなり、時間、時間で経済効率ばかり追い、子どもたちは電子メディアのゲームやDVDに夢中。これでは言葉が育つはずではなく、奪い返すには地域社会の再生がどうしても必要だろうと思います。地域社会の中で異年齢の人たちが集まって言語活動、お祭りでもイベントでも仕掛けて共同作業をする中で、人間関係と言葉の関係を子どもたちが見聞きすることができる。そのとき人間を学び、言葉を学ぶことができるよう思うのですが。

高塚 一昔前までのよう、大勢の家族や地域の中では、他者に向かう力が自然に身につくことが難しい時代ですよね。どうしたらしいか? 一つは、家庭の中でも子どもたちに何か役割を与えて責任をもたせて手伝い体験をさせる。そばにいる人から喜ばれ、役に立つたという「役立ち感」が生まれます。もう一つは地域の中で社会性、社会力をもつた大人の中に入れてあげることですね。真似をしながら、言葉遣い、礼儀、コミュニケーションを学びます。

山根 全国津々浦々に地域グループがあつて、そこに必ず言語トレーナーとも言えるような役割を果たせる、言葉についても意識ある大人が一人ずつ核になるように配置される、そういう仕組みを作つたら変わつていくのではないかと思つています。

高塚 いいですね。言語トレーナー、言語リーダーですか。言葉リーダーなどを養成しながら人と関わり結ぶ力を構築していく力も身につけていく。そういうプログラム、総合的に人間的なものを身につけてもらうような講座、塾みたいなものをつくりたいですね。

山根 まずは配置する人材をつくらなければならぬですね。だれもが自分の納得できる人生を生きられる世の中をつくる。そのため今どういいう言葉が必要か、何を考えることが必要か。そういう志、根本のところが分かる人でないと、どんなでもない言葉狩りみたいな組織になりますから。

高塚 世界中が今大きな転換点ですね。明日どうなるか分からぬぐらい変わりつつあります。これらの時代を生きる子どもたちは、ちゃんと人間力をつけておいてあげないと生きていけないと思います。

高塚 とにかく歩かない道はできません。ここまで、順風満帆の道のりではありませんでした。茨の道かな? だけど、あきらめないで火を消すことなく、ここまで歩きながらコツコツ道をつくりつきました。

山根 そのコツコツが頼りで、目的が正しければコツコツやっていくうちに道は開けてくる。

高塚 言葉やコミュニケーションの道をつくるために、だれかが一步を踏み出す。歩きながら走りながら道をつくる。まず一步を踏み出しましょう。